寒山拾得

森鷗外

唐（とう）の貞観（じょうがん）のころだというから、西洋は七世紀の初め日本は年号というもののやっと出来かかったときである。閭丘胤（りょきゅういん）という官吏がいたそうである。もっともそんな人はいなかったらしいと言う人もある。なぜかと言うと、閭は台州の主簿になっていたと言い伝えられているのに、新旧の唐書に伝が見えない。主簿といえば、刺史（しし）とか太守とかいうと同じ官である。支那全国が道に分れ、道が州または郡に分れ、それが県に分れ、県の下に郷があり郷の下に里がある。州には刺史といい、郡には太守という。一体日本で県より小さいものに郡の名をつけているのは不都合だと、吉田東

伍さんなんぞは不服を唱えている。閭がはたして台州の主簿であったとすると日本の府県知事くらいの官吏である。そうしてみると、唐書の列伝に出ているはずだというのである。しかし閭がいなくては話が成り立たぬから、ともかくもいたことにしておくのである。

さて閭が台州に着任してから三日目になった。長安で北支那の土埃（つちほこり）をかぶって、濁った水を飲んでいた男が台州に来て中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになったので、上機嫌である。それにこの三日の間に、多人数の下役が来て謁見（えっけん）をする。受持ちの事務を形式的に報告する。そのあわただしい

中に、地方長官の威勢の大きいことを味わって、意気揚々としているのである。

閭は前日に下役のものに言っておいて、今朝は早く起きて、天台県の国清寺をさして出かけることにした。これは長安にいたときから、台州に着いたら早速往こうときめていたのである。

何の用事があって国清寺へ往くかというと、それには因縁がある。閭が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立とうとしたとき、あいにくこらえられぬほどの頭痛が起った。単純なレウマチス性の頭痛ではあったが、閭は平生から少し神経質であったので、

かかりつけの医者の薬を飲んでもなかなかなおらない。これでは旅立ちの日を延ばさなくてはなるまいかと言って、女房と相談していると、そこへ小女が来て、

「只今（ただいま）ご門の前へ乞食坊主（こじきぼうず）がまいりまして、ご主人にお目にかかりたいと申しますがいかがいたしましょう」と言った。

「ふん、坊主か」と言って閭はしばらく考えたが、「とにかく逢ってみるから、ここへ通せ」と言いつけた。そして女房を奥へ引っ込ませた。

元来閭は科挙に応ずるために、経書（けいしょ）を読んで、五言の詩を作ることを習ったばかりで、仏典を読んだこと

もなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士というものに対しては、なぜということもなく尊敬の念を持っている。自分の会得（えとく）せぬものに対する、盲目の尊敬とでも言おうか。そこで坊主と聞いて逢おうと言ったのである。

まもなくはいって来たのは、一人の背の高い僧であった。垢（あか）つき弊（やぶ）れた法衣（ほうえ）を着て、長く伸びた髪を、眉の上で切っている。目にかぶさってうるさくなるまで打ちやっておいたものと見える。手には鉄鉢（てっぱつ）を持っている。

僧は黙って立っているので閭が問うてみた。「わた

しに逢いたいと言われたそうだが、なんのご用かな」
僧は言った。「あなたは台州へおいでなさることにおなりなすったそうでございますね。それに頭痛に悩んでおいでなさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思って参りました」
「いかにも言われる通りで、その頭痛のために出立の日を延ばそうかと思っていますが、どうして直してくれられるつもりか。何か薬方でもご存じか」
「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。ただ清浄な水がこの受糧器に一ぱいあればよろしい。呪（まじない）で直して進ぜます」

「はあ咒をなさるのか」こう言って少し考えたが「仔細あるまい、一つまじなって下さい」と言った。これは医道のことなどは平生深く考えてもおらぬので、どういう治療ならさせる、どういう治療ならさせぬという定見がないから、ただ自分の悟性に依頼して、その折り折りに判断するのであった。もちろんそういう人だから、かかりつけの医者というのもよく人選をしたわけではなかった。素問（そもん）や霊枢（れいすう）でも読むような医者を捜してきめていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのに面倒のない医者にかかっていたのだから、ろくな薬は飲ませてもらうことが出来なかったのである。今

乞食坊主に頼む気になったのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでする呪なら間違ったところで危険なこともあるまいと思ったのとのためである。ちょうど東京で高等官連中が紅療治（べにりょうじ）や気合術に依頼するのと同じことである。

閭は小女を呼んで、汲みたての水を鉢（はち）に入れて来いと命じた。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧げて、じっと閭を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、湯でも茶でもいいのである。不潔な水でなかったのは、閭がためには勿怪（もっけ）の幸いであった。しばらく見つめているうちに、閭は覚えず精神を

僧の捧げている水に集注した。
　このとき僧は鉄鉢の水を口にふくんで、突然ふっと閭の頭に吹きかけた。
　閭はびっくりして、背中に冷や汗が出た。
「お頭痛は」と僧が問うた。
「あ。癒（なお）りました」実際閭はこれまで頭痛がする、頭痛がすると気にしていて、どうしても癒らせずにいた頭痛を、坊主の水に気を取られて、取り逃がしてしまったのである。
　僧はしずかに鉢に残った水を床に傾けた。そして
「そんならこれでお暇（いとま）をいたします」と言うや否や、

くるりと閭に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。
「まあ、ちょっと」と閭が呼び留めた。
僧は振り返った。「何かご用で」
「寸志のお礼がいたしたいのですが」
「いや。わたくしは群生（ぐんしょう）を福利し、憍慢（きょうまん）を折伏（しゃくぶく）するために、乞食（こつじき）はいたしますが、療治代はいただきませぬ」
「なるほど。それでは強（し）いては申しますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺っておきたいのですが」
「これまでおったところでございますか。それは天台の国清寺で」

「はあ。天台におられたのですな。お名は」
「豊干（ぶかん）と申します」
「天台国清寺の豊干とおっしゃる」閭はしっかりおぼえておこうと努力するように、眉をひそめた。「わたしもこれから台州へ往くものであってみれば、ことさらお懐かしい。ついでだから伺いたいが、台州には逢いに往ってためになるような、えらい人はおられませんかな」
「さようでございます。国清寺に拾得（じっとく）と申すものがおります。実は普賢（ふげん）でございます。それから寺の西の方に、寒巌という石窟（せきくつ）があって、そこに寒山（かんざん）と申すもの

がおります。実は文殊でございます。さようならお暇をいたします」こう言ってしまって、ついと出て行った。

こういう因縁があるので、閭は天台の国清寺をさして出かけるのである。

全体世の中の人の、道とか宗教とかいうものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、ただ営々役々と年月を送っている人は、道というものを

顧みない。これは読書人でも同じことである。もちろん書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられまい。しかしそうまで考えないでも、日々の務めだけは弁じて行かれよう。これは全く無頓着（むとんじゃく）な人である。

つぎに着意して道を求める人がある。専念に道を求めて、万事をなげうつこともあれば、日々の務めは怠らずに、たえず道に志していることもある。儒学に入っても、道教に入っても、仏法に入っても基督（クリスト）教に入っても同じことである。こういう人が深くはいり込むと日々の務めがすなわち道そのものになってしまう。つづめて言えばこれは皆道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道というものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればと言ってみずから進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がいるように思って、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して言ってみると、道を求める人なら遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、ここに言う中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生

ずる。盲目の尊敬では、たまたまそれをさし向ける対象が正鵠を得ていても、なんにもならぬのである。

閭は衣服を改め輿に乗って、台州の官舎を出た。従者が数十人ある。

時は冬の初めで、霜が少し降っている。椒江の支流で、始豊渓という川の左岸を迂回しつつ北へ進んで行く。初め陰っていた空がようよう晴れて、蒼白い日が岸の紅葉を照している。路で出合う老幼は、皆輿を

避けてひざまずく。輿の中では閭がひどくいい心持ちになっている。牧民の職にいて賢者を礼するというのが、手柄のように思われて、閭に満足を与えるのである。

台州から天台県までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆるゆる輿を舁(か)かせて来たので、県から役人の迎えに出たのに逢ったとき、もう午(ひる)を過ぎていた。知県の官舎で休んで、馳走(ちそう)になりつつ聞いてみると、ここから国清寺までは、爪尖上(つまさきあ)がりの道がまた六十里ある。往き着くまでには夜に入りそうである。そこで閭は知県の官舎に泊ることにした。

翌朝知県に送られて出た。きょうもきのうに変らぬ天気である。一体天台一万八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるようだが、とにかく虎のいる山である。道はなかなかきのうのようには捗（はかど）らない。途中で午飯（ひるめし）を食って、日が西に傾きかかったころ、国清寺の三門に着いた。智者大師の滅後に、隋（ずい）の煬帝（ようだい）が立てたという寺である。

寺でも主簿のご参詣だというので、おろそかにはしない。道翹（どうぎょう）という僧が出迎えて、閭を客間に案内した。さて茶菓の饗応が済むと、閭が問うた。「当寺に豊干という僧がおられましたか」

道翹が答えた。「豊干とおっしゃいますか。それはさきころまで、本堂の背後の僧院におられましたが、行脚に出られたきり、帰られませぬ」

「当寺ではどういうことをしておられましたか」

「さようでございます。僧どもの食べる米を舂いておられました」

「はあ。そして何かほかの僧たちと変ったことはなかったのですか」

「いえ。それがございましたので、初めただ骨惜しみをしない、親切な同宿だと存じていました豊干さんを、わたくしどもが大切にいたすようになりました。する

とある日ふいと出て行ってしまわれました」
「それはどういうことがあったのですか」
「全く不思議なことでございました。ある日山から虎に騎(の)って帰って参られたのでございます。そしてそのまま廊下へはいって、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一体詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました」
「はあ。活きた阿羅漢(あらかん)ですな。その僧院の址(あと)はどうなっていますか」
「只今もあき家になっておりますが、折り折り夜になると、虎が参って吼(ほ)えております」

「そんなご苦労ながら、そこへご案内を願いましょう」こう言って、閭は座を起った。

道翹は蛛(くも)の網(い)を払いつつ先に立って、閭を豊干のいたあき家に連れて行った。日がもう暮れかかったので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つない。道翹は身をかがめて石畳の上の虎の足跡を指さした。たまたま山風が窓の外を吹いて通って、うずたかい庭の落ち葉を捲き上げた。その音が寂寞(せきばく)を破ってざわざわと鳴ると、閭は髪の毛の根を締めつけられるように感じて、全身の肌に粟(あわ)を生じた。

閭は忙(せわ)しげにあき家を出た。そしてあとからついて

来る道翹に言った。「拾得（じっとく）という僧はまだ当寺におられますか」
道翹は不審らしく閭の顔を見た。「よくご存じでございます。先刻あちらの厨（くりや）で、寒山と申すものと火に当っておりましたから、ご用がおありなさるなら、呼び寄せましょうか」
「ははあ。寒山も来ておられますか。それは願ってもないことです。どうぞご苦労ついでに厨にご案内を願いましょう」
「承知いたしました」と言って、道翹は本堂について西へ歩いて行く。

閭が背後（うしろ）から問うた。「拾得さんはいつごろから当寺におられますか」

「もうよほど久しいことでございます。あれは豊干さんが松林の中から拾って帰られた捨て子でございます」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか」

「拾われて参ってから三年ほど立ちましたとき、食堂（じきどう）で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、そのほか供（そな）えものをさせたりいたしましたそうでございます。そのうちある日上座の像に食事を供えておいて、自分が向き合って一しょに食べているのを見つけられまし

たそうでございます。賓頭盧尊者（びんずるそんじゃ）の像がどれだけ尊いものか存ぜずにいたしたことと見えます。唯今（ただいま）では厨で僧どもの食器を洗わせております」

「はあ」と言って、閭は二足三足歩いてから問うた。

「それから唯今寒山とおっしゃったが、それはどういう方ですか」

「寒山でございますか。これは当寺から西の方の寒巌と申す石窟に住んでおりますものでございます。拾得が食器を滌（あら）いますとき、残っている飯や菜を竹の筒に入れて取っておきますと、寒山はそれをもらいに参るのでございます」

「なるほど」と言って、閭はついて行く。心のうちでは、そんなことをしている寒山、拾得が文殊（もんじゅ）、普賢（ふげん）なら、虎に騎（の）った豊干はなんだろうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思い惑うときのような気分になっているのである。

「はなはだむさくるしい所で」と言いつつ、道翹は閭を厨のうちに連れ込んだ。

ここは湯気が一ぱい籠（こ）もっていて、にわかにはいっ

て見ると、しかと物を見定めることも出来ぬくらいである。その灰色の中に大きい竈が三つあって、どれにも残った薪が真赤に燃えている。しばらく立ち止まって見ているうちに、石の壁に沿うて造りつけてある卓の上で大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜から移しているのが見えて来た。

このとき道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得」と呼びかけた。

閭がその視線をたどって、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧のうずくまって火に当っているのが見えた。

一人は髪の二三寸伸びた頭を剥き出して、足には草履をはいている。今一人は木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木履をはいている。どちらも痩せてみすぼらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼びかけたとき、頭を剥き出した方は振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だと見える。帽をかぶった方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

閭はこう見当をつけて二人のそばへ進み寄った。そして袖を掻き合わせてうやうやしく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閭

丘胤（きゅういん）と申すものでございます」と名のった。

　二人は同時に閭を一目見た。それから二人で顔を見合わせて腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思うと、一しょに立ち上がって、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が「豊干がしゃべったな」と言ったのが聞えた。

　驚いてあとを見送っている閭が周囲には、飯や菜や汁を盛っていた僧らが、ぞろぞろと来てたかった。道翹は真蒼（まっさお）な顔をして立ちすくんでいた。

大正五年一月

底本：「日本の文学3　森鷗外（二）」中央公論社
１９６７（昭和42）年２月４日初版発行
入力：佐野良二
校正：伊藤時也
２０００年９月12日公開
２００４年12月４日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。